

---

# 姫君の忘れ物

大朋堂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫君の忘れ物

### 【Nコード】

N6267A

### 【作者名】

大朋堂

### 【あらすじ】

300年におよび大陸を支配していた透清国は、滅亡の危機にあった。その中、最後の皇帝に3歳の少女が選ばれる。新たな時代が押し寄せる中、伝統の中で生きる者、新たな覇権を握ろうとする者。歴史のたそがれ時を描いた。

## 透清国

### 第一章 透清国

高貴な少女の最初の記憶は、しわがれた細い指である。指は豪華なベッドから真っ直ぐ少女に向けられていた。少女はベッドにいる老女の姿を見て、泣き喚いた。

いや、少女に老女の姿は見えていない。天幕つきのベッドは淡いピンクのレースに覆われていたからだ。その間から、指だけがのぞいていた。

少女はただ漠然とその老女が怖かった。

まだ幼い少女は、老女が何者であるか知らない。その老女こそ、透清国の実質的支配者・喜太后であつた。喜太后の機嫌を損ね、黄泉の国に旅立つた者は数知れない。

喜太后の前で少女が泣き始めると周りにいる者たちは、喜太后の機嫌を損ねなかつたか、緊張に顔を引きつらせた。

しかし、喜太后は気にした様子もなく言つた。

「もう良い。私はこの子に決めた。向こうに連れて行つて、お菓子里でもあげなさい」

場に安堵の空気が広がる。

少女は喜太后のいる部屋から連れ出された。すぐに少女の目の前には、ありとあらゆるお菓子が並べられた。けれども少女は当分泣き止まなかつた。

枯れ色が大地を覆っていた。季節が秋から冬へ変わる事だけが原因ではないようだ。人びとの顔には不安と焦燥が深く刻まれている。男達は仕事が一と段落つくと、木陰に即席の机と椅子を設け、マージャンやトランプで時間を潰す。その姿も周りを気にする姿がよく見られ、落ちつかない様子が目立つ。

時は黄暦909年。透清国内情勢は、安定とはほど遠かった。300年に及ぶ歴史の中で、透清国は、最大領域を支配した。現在も地図の上での領土は変わっていない。しかし、透清国領土は色とりどりに塗られていた。すでに透清国は外国軍隊の駐屯を認めており、実質的に統治権が及んでいるのは、全領域の三分の一にも及ばない北西部のみとなっている。

透清国が外国からの干渉を受け始めたのは、およそ今から50年前である。喜太后が権力を持ち始めた頃と重なる。

透清国は、代々勤勉で実直な皇帝を輩出してきた。それは、皇帝を決める段階で様々な工夫がなされたことによる。もともとこの地方を支配していた王朝は、長子が皇帝を継承することを基本としていた。

それを、透清国三代皇帝・光明帝が変えたのだ。皇帝継承者は、皇帝が死ぬまで公表されず、玉座の後ろに掲げられた「光明正大」の額に挟んでおく。こうすることにより、皇帝は意思を状況にに応じてゆっくり選ぶことができ、選ばれる可能性のあるものは切磋琢磨し、自分を磨くのである。もちろん、皇帝は血筋を重んじて決められる為、実子である事が基本である。

新皇帝の発表は皇帝が崩御して一カ月後に正式に発表される事となっていた。

この慣例が壊れたのが喜太后の時代である。

第九代皇帝・豊善帝は妃に喜太后を迎えた。喜太后はもとも宮中の女官であったが、懐妊して貴妃に昇格し、実子が豊善帝の一人息子で、第十代皇帝・治正帝となったため太后となった。皇帝の妻たちは、皇后、皇貴妃、貴妃、妃、？、貴人、常在、答應と八つの身分に分かれている。

彼女は太后となるとすぐに、太后による垂簾聴政（皇太后が幼帝に代わって政治を聴くこと）を奏請した。

喜太后は権力に異様なまでに執着していた。はじめ、垂簾聴政は多くの者の反対を受けて、実現しなかった。喜太后はこの恨みを忘れ

ず様々な方面に触手を伸ばすことを学んだ。反対した者達を、皇帝の母親という身分を利用して、巧みに一人また一人と権力の中枢から遠ざけていったのである。

そして、ついに喜太后の力は皇帝に匹敵するほどになっていった。治正帝は自らの判断で政治を行ないたかったが、偉大な母親に逆らうことができなかった。理想と現実にさいなまれた治正帝は、気苦勞も多く、若くしてこの世を去ってしまう。

治正帝は後継者を決めず、子供もいないままにこの世を去ってしまった。喜太后は妹を豊善帝の弟・王翔の妻としていた。喜太后は後継者に、王翔と妹の間に生まれた載純を指名することにした。皇帝が後継者を決めていなかった以上、喜太后が決めるのは正当と考えられる。表立って反対する者はいなかった。

こうして第十一代皇帝・望緒帝が誕生した。

本来はもつと議論されるべきだったのかもしれない。しかし、透清国皇帝の座を長く空席にしておくことは、透清国を維持する為に短所が多かった。透清国に対する外国勢力の干渉は日に日に強くなっていたのである。

イングルという国が不当に港にやってきて、突然開港を求めてきた。それを拒否するとイングルは街に向けて大砲を撃ち放った。あまりに突然な非合理的な行動に対し、透清国は驚きながらも応戦した。けれども、長く平和が続いていた透清国は軍事面で大きく及ばなかった。

毎年軍事に関する予算は組まれているのだが、実際に軍事強化や整備に使われてはいなかった。透清国は近代兵器を所有しておらず、それに対抗する術などあるはずもなかったのだ。

透清国に外国人が入ってくることで、もともとその地に住んでいる住人との小競り合いも耐えなかった。それを理由に脅してくる国もある。すでに軍事面で国を守る機能がないと外国勢力に知られてしまった透清国が唯一国として認められている理由は、皇帝を中心とした国家体制と伝統にあったのだ。

外国諸国にとって、交渉相手が明確である方が好ましい。労せずして、多くのものを手に入れる事ができるのだ。

喜太后は望緒帝の正妃として弟の娘を選んだ。望緒帝は様々な面で喜太后の干渉を好としなかった。そこで、新しい感性をもった若手の官吏をまとめ、外国勢力の手を借りて、喜太后を排除しようとした。しかし、結局この試みは、実行前に喜太后の知るところとなった。外国勢力に頼るという行為を喜太后は決して許さなかった。

喜太后は諸外国に対しては対等であるべきであり、借りを作ることは透清国を滅ぼすと信じていた。望緒帝の行為は正にそれであった。喜太后は望緒帝の野心を嫌いではなかった。それ以上に期待していた。その分、この裏切りを決して許さず、望緒帝を軟禁した。望緒帝は計画が事前に漏れて失敗したことに深く失望した。そして軟禁されてから3年余りでこの世を去ったのだった。望緒帝が死んだ時、また子供がいなかった。そして、白羽の矢が立ったのが、望緒帝の弟の娘であった。

今回の決定も喜太后によって行なわれた。喜太后の力はもはや揺るぎなく、誰も何も言わなかった。けれども、突然の女帝誕生に、不安を感じた者がいるのも当然だろう。

闇に耳を澄ませば聞こえてくる。

「なんと、このような時期に女帝を選ばれるとは、喜太后は何を考えておられるのか」

「これ、滅多なことを言うのでは、ありませんぞ。誰に聞かれているやらわかりませぬ」

「いや、その通りではないか。血筋を重んじられるなら、耀華殿がおられる。御年16歳で聡明な子と聞いている。なにより男の子であられるぞ」

「耀華殿の……。無理であろうな。耀華殿の父君王翔様と喜太后は豊善帝の御世より仲が良くないと聞いております」

「そうではあるが……。喜太后に唯一、真っ向から意見を言える方

であるな。しかし、それももう例の事より10年、公の席に顔を出しておられんよ」

「これからどうなるのであろうな」

「女帝が吉と出るか、凶と出るか、まあ喜太后の天下が続く限り、変わらないのかね……」

物音が近づくと密会は何事もなかったように、解散した。

## 宣授帝の誕生

### 第二章 宣授帝の誕生

なぜ喜太后が女帝を選んだのか。その理由はわからない。なぜなら彼女はこの指名後、わずか一週間でこの世を去ってしまったからだ。かなり前から体調を壊していたが、こんなにも早く逝く事になるとは、周りも本人も思っていなかった。

特に表向き幼い皇帝に変わり政治を執る摂政王の地位を得た実父・載恵は、喜太后に呼ばれて次のように言われていた。

「国政に関するすべての事はどんな些細なことも私に報告し、訓示裁断を受けるように。勝手な判断をすることは許しません」

その圧倒的な威圧感に摂政王は腰を抜かしてしまった。

透清国最後の皇帝の即位式は、喪のため、一ヶ月後れることとなった。

黄暦909年10月1日、透清国末代皇帝・宣授帝が誕生した。

即位式は午後から行なわれるが、その前に告天式という天上の帝に地上の帝が新たに就任することを報告する儀式が行なわれる。透清国では帝は 太陽の象徴であり、告天式は日の出とともに行なわれる。

「眠い……」

周りの緊張をよそに、少女は目を擦り眠気に耐えていた。3歳の子供にとって、寝るには遅すぎ、起きるには早すぎる時間だった。世話係の者達が慌てて少女の機嫌をとろうとする。その中の一人に少女は聞いた。

「お父様、お母様はどこ？」

「お父様は向こうにいらっしやいます。お母様には今日の午後には



お会いできますよ」

「本当!？」

少女はそれを聞いて、急に元気になる。父親とはほとんど毎日あっているが、母親とはあの日、喜太后に呼ばれた日から会っていない。すでに少女は皇帝としての正統性をより強固にする為、望緒帝の養子になっていたのだ。宮廷内には、まだ治正帝の妃も望緒帝の妃も存命しており、彼女たちにとって皇帝の實の母親など要らなかつたのである。彼女たちは、何かと少女に干渉してきた。實の父親である摂政王に対しても、摂政王としての役割を超えて皇帝に会うことを許さなかつた。

外から鐘の音が静寂の中に広がった。

深く響く音は、人びとに新たな皇帝の誕生を告げた。東の空が徐々に白銀に輝き始める。

帳の中にいた一人の男が少女の手足を丁寧に水で洗いはじめる。

少女はくすぐったくて、足をバタつかせた。その男に水をかかる。男はずっと顔に笑顔を浮かべているので、少女は面白くなって、足の動きはどんどん早くした。あつという間に、男はびしょびしょになってしまった。それでも、男は何も言わず、丁寧に少女の足を洗い続け、服を着替えるのを手伝った。

少女の着替えが終ると、男も濡れた上の服だけを着替える。そして、少女の手を恭しくとって、帳の外に出た。

まだ、西の空は暗い。少女は手を思いっきり伸ばした。空に光るキラ星を取ろうとしたのだろうか。長い一日が始まる。

幼き皇帝にとって、この日は退屈なだけだったかもしれない。求められたことは、ただおとなしく玉座に座っていることだけだった。午前中は良かったが、午後になると、もう我慢できなくなっていた。椅子の上に立ったり、服を脱ごうとしたり、とにかく座っているのが耐えられなくなっていた。摂政王が後ろから、皇帝の手を押さえる。

そしてついに、皇帝は一ヶ月ぶりに実母と再会した。母は、祖母を支えるように階段を上り、幼い皇帝の前にやってきた。今まで何人も人間がそうだったように、玉座よりかなり離れた場所で止まり、膝を地につけて頭を下げる。頭を上げたとき、母の目が光っているように見えた。次の瞬間、目から涙がこぼれ落ちる。それを隠すように、また母は頭を下げた。皇帝は我慢できなくなって、母に向って走り出そうとする。

皇帝は摂政王の手を振り解こうとする。しかし、摂政王はそれを許さなかった。周りの者たちも、不自然にならないように、皇帝を止めた。母と祖母を急いで退出させる。

幼い皇帝にはなぜ皆が邪魔をするのか分からなかった。

なんで、母の元に行く事が許されないのか。何で母は泣いていたのか。

皇帝は泣いた。そして、叫んだ。

「まあー！ー！」

声は、悲痛に響いた。幾人かの心に不吉な予感を残して、声が空気に溶け込んで消えた。

皇帝になったからといって、私の生活は特に変わっていない。変わったことといえば、皆が私のことを『陛下』と呼ぶようになったこと、移動する時は後ろに10メートル先まで人がついてくること、食事にやたらと時間がかかるようになったことだろうか。

皇帝の毎回の食事には作法・順番が決まっていて、私が実際に食事をするまでに一時間はかかる。暖かい食事を食べる事はない。

「茶力士、母上にはいつ会えるの？」

茶力士は、私の世話係だった。私が皇帝であつた時に一番長くときを過ごした者だろう。私にいつもメチャクチャにされていたが、宮廷内では割と高い地位になる。その茶力士に対して、私は思い出したように質問する。

「母上方にはいつもお会いになっているではないですか」

茶力士のとぼけた返事に私は怒って、茶力士の足を思いつきり蹴った。

「あんなのは、母上ではない！茶力士のバカ！」

茶力士の言った母上方とは、治正帝の妃・静太后と望諸帝の妃・安太后の事である。私が実際に口にする食事は、彼女達専用の厨房で作られたものばかりだった。私も皇帝として専用の厨房を所有していたが、食材も料理人も太后たちの方が格段に良いものが揃っていた。彼女達は食事の度に私に料理を届けた。そして、私は食事が終ると、彼女達の部屋を訪ねて、お礼を言うのである。これが毎日の日課であった。

ただ、残念なことは幼い頃の私は、食事をなかなか楽しめなかった。彼女達にとって食事を届ける事が唯一私に対して母親らしいことをしているつもりだったらしいが、私は何も感じていなかったのだ。

「茶力士！私は皇帝だな」

「ハッ。そうでございます」

「お前はいつも、皇帝はなんでもできる。この世界を統一する絶対権力者だと言っているな」

「ハッ。そうでございます」

「なのに、なぜ母上に会えない。お前は、嘘つきじゃないか！」

茶力士はこう私が言くと、いつも黙り込んでしまう。

「もういい」

私は机の上に置いてあったコップを茶力士に向かって思いつきり投げた。だが、そのコップは思ったより重く、茶力士まで届かずに地上に落ちて粉々に砕けた。

私は走って部屋を出ようとした。部屋の中にいた影のような者達が、さつと扉の前に立ち、私の行方を遮った。そして、地に膝をつける。幼い私には新たに生まれたその壁を壊す事ができなかった。私の母への思いは少しずつ薄れていったが、完全に消えることはなかった。時々思い出しては、周りの者を困らせていた。

父はいつでも会いにこられるはずであつたが、週に一度か二度しか会いにこなかった。それは忙しいからか、太后達の干渉か、父自身の判断かはわからない。

「陛下、いかがお過ごしですか？」

父は、もと娘の私に丁寧な挨拶をした。

「いつもと変わらない」

私は興味なさそうに、そっけなく答える。父の口もとが少し綻んだ。

「そうですか。それは良かった。私達も陛下のおかげで、平穩が保たれています」

父との面談は毎回10分ほどだった。私は父の態度が気に入らなくて、父が来てもいつも不機嫌な態度しか取れなかった。なぜ、前みたいに膝の上に座らせてくれない。頭を撫でてくれない……

この時期、摂政王は確かに多忙だった。摂政王は、今まで政治に関わったことはない。文化面では書道・絵画・音楽、何をとっても超一流だったが、政治に関しては素人同然だった。それなのに透清国で最も複雑な時期に権力の中枢に放り込まれてしまったのだ。

摂政王の心労は溜まっていった。けれども、状況は日に日に緊迫し、周りに摂政王を気遣う余裕はなかった。

透清国は外国からの圧力だけではなく、内側にも反乱を抱えていた。

今までの内乱は、単発的なものばかりでどうにか押さえる事ができていた。ところが最近民衆の中に指導者が現れたのだ。名前を春日光という。

彼の主張はこうだ。皇帝という閉鎖的な空間で決められた者に国の運営を任せるのではなく、国民が決めた人物に国の運営を任せる、新しい国を建設することである。彼は透清国内だけでなく、外国にも渡り、自分の考え方を説き、バラバラだった不満の方向を一つにまとめていった。

当時の宮中はそんなこと知る由もなかった。いや、知ったからといって国の中心が生活を変えるわけには行かない。

私は毎日わがままし放題だった。気にいらなければ何でも壊し、すぐに大きな声をあげた。遊び相手は茶力士と孝彦だった。孝彦もまた茶力士同様私の世話係の一人である。

お気に入りの遊びは、茶力士と孝彦を四つん這いにさせ、私は茶力士の上に乗って孝彦を追いかけることだった。私はいつも茶力士の髪を思いつきり引っ張っていたから、彼の髪は薄くなったのかもしれない。私が10歳になった時、彼の髪量は頭皮を隠す能力を失っていた。

私は物心ついたときから、怒られたことがない。私を唯一諫めることができたのは、乳母だけだった。彼女の事を皆、雪と呼んでいた。

「雪ー」

私は広く美しい中庭で雪を見つけて、走った。

「陛下、どうされたのです？」

雪に抱きつくと、雪は私の頭をそつと撫でてくれる。雪の手は真っ白くて、ちょっとカサカサしているが、私がこの世で一番大好きな手だ。

「これー」

私は雪の前に手を伸ばした。

「あっ！」

手の中で饅頭が潰れていた。私は悲しくて大きな声で泣いた。

「陛下、これを私に食べさせて下さるうとしたのですか？」

朗らかで、悲しみを包み込むような表情が雪の顔に浮かぶ。

「これ、とってもおいしかったから雪に食べてもらおうと思って」

「陛下はお優しいですね。ありがとうございます」

そう言つと、雪は私の手から潰れた饅頭を、まるで宝物でも預かるように受け取った。そして、それを口に運ぶ。

「本当、おいしいですね」

雪は華が咲くように鮮やかに笑った。私は雪の笑顔が大好きだった。雪の笑顔が見たくて、雪の笑顔の為なら何でもしてあげたいと思った。

「ごめんね。雪。でも、あっちにはまだきれいなのがいっぱいあるよ。一緒に食べない」

雪はまた私の頭を軽く撫でた。

「陛下は本当にお優しいですね。でも、私はこれで十分満足です」  
雪はまた遠くを見つめる。雪はいつも遠くを見て、寂しそうな顔をしていた。

「でも、いっぱいあるんだよ。一人では食べきれないよ」

「そうですね。では、陛下が好きな人に差し上げるのはいかがですか？」

「じゃあ。雪だよ」

「私以外ですよ」

「うーん。雪以外？思いつかないよ」

「そうですね？陛下の周りには陛下の事を思っている方がたくさんいますよ」

「それは当たり前でしょ。だって、私は皇帝だもの」

雪はまた私の頭を軽く撫でた。作った笑顔の裏に、深い悲しみにじむ。

「お父様や茶力士はどうですか？」

「摂政王は忙しくて、一緒に食べてくれないよ。茶力士かー」

私は雪の足元をみた。黒い丸い石が目に入った。

「ねえねえ。この石、饅頭の中に入っているあんこに見えない？」

「それをどうされるのですか？」

「饅頭の中に入れて、茶力士にあげるの」

「まあ、そんなことしたら、茶力士の歯が砕けてしまいますよ」

「そう！そうなんだよ！茶力士の歯が砕けるところが見られるんだよ」

「歯が砕けたら、お饅頭が食べられなくなってしまうですよ。せつかくのおいしいお饅頭なのに」

雪は私の頭を撫でながら、悲しそうな顔をした。なんで、そんな悲しそうな顔をするのだろう。雪の悲しい顔なんて見たくないのに。「おいしいものを食べられなくなるなんて、とっても悲しいことですな」

「うん。おいしいもの食べられなくなるのは嫌だ」

「茶力士もおいしいものを食べられなくなるのは嫌だと思いますよ。私もおいしいものを、陛下から頂いたお饅頭を食べられなくなるのは、悲しいです」

「うん。饅頭の中に石を入れるのやめる」

雪の表情が少し晴れた。

「陛下はとっても良い子ですね。では、お饅頭がダメになってしまわないうちに、茶力士さんにお饅頭を差し上げてください」

雪は膝からゆっくりと優しく、私を降ろした。

「はい」

私は大きく頷いて、雪のもとを離れる。

でもやっぱり雪の傍にもう少し居たくて、振り向いた。もう、雪は私を見ていなかった。

雪は小さな皇帝を見送った後、湖に浮かぶ小船に目を向けた。

そこでは太后達が、双眼鏡を片手に談笑している。

「あの女、いつまでここにおいておくつもりですか？」

安太后は双眼鏡を下ろして、静太后に話しかける。

「今すぐにでも追い出しても良いのじゃが、茶力士が反対しての」

「茶力士が！？男としての機能をなくしている者でも……」

静太后が目を細めるのに気づいた、安太后は思わず口を閉ざす。

「茶力士は喜太后に信任されておった。軽々しい事を言うものではないぞ」

「失礼しました」

「まあ良い。いずれはここから出て行ってもらうがの。もうしばらくは、茶力士に免じて置いて置いても良からう」

「そうですね」

安太后は笑顔を扇でゆつくりと隠した。

5歳になると、本格的に帝王教育が始まった。それまでは茶力士が故事を読んでくれたり、文字を教えてくれたりしていたが、専門の教師が三人つくようになった。三人の中で一番長く私と供にいたのは、花咲陸先生だった。彼は国学を専門としており、たくさんの魅力的な話をしてくれた。私が皇帝である為、誰も私を叱ることができず、幼い時は我慢ができなかった。勉強に対しても、席にじっとしていることができず、よく教室から飛び出した。

花咲先生の授業も何度も飛び出したが、それでも他の授業に比べればましだったと思う。彼は真面目な人だったので、私を怒鳴ったことがある。

その日はなんだか授業を受ける気がしなかった。先生の話聞くのが退屈で耐えられなくなった私は、教科書も筆も机にあるもの全部床に落として、教室を飛び出した。

庭でバツタを見つけた私は、バツタを追いかけるのに夢中になる。最初は仕方なく待っていたが、何度読んでも戻ってくる様子がないのでついに、顔を真っ赤にして怒ったのだ。

「陛下！今は授業中ですぞ！」

私はなぜ花咲先生がそう言ったかわからなかった。反対に耳まで真っ赤な先生を見て、笑ってしまう。

「陛下！」

先生が何か言おうとした時、茶力士が走ってきた。

「花咲先生。落ち着いてください」

「これが落ち着けますか！国の主がいくら幼いとはいえ、このようなことでは……」

「先生のおっしゃることは分かります。ですが、実は今陛下には悪



い霊の欠片が取り付いていのです。これはけつして、陛下のせいではありません。陛下をお守りしなくてはいけませんから、今日の授業は中止させていただきます」

そういうと「失礼いたします」と言つて、茶力士は私を抱えた。しばし、啞然とする花咲先生を置き去りにして、茶力士は私を今まで行つたことのない部屋に連れて行つた。

「さあ、お入り下さい。陛下が陛下にお戻りになりましたら、お迎えに上がります」

そういうと、茶力士は私を部屋に残して扉を閉ざした。

扉を閉ざすと、その部屋は真つ暗になる。部屋には窓もなく、扉から光が漏れることさえなかった。私は怖くなって、大きな声で泣き喚き、扉を叩いた。しかし、扉の向こうからの反応はなかった。

芸術を教えてくれたのは王明月先生だった。王先生は高齢で一年ほどたつと体調不良を訴え、里に帰ってしまった。だから、あまり王先生のことは覚えていない。確か、とても神経質な人だったと思う。王先生が去つた後は花咲先生が当分引き継ぎ、その後鄭康正先生がその任を引き継いだ。彼は芸術家と言うよりは政治家だった。授業中も機を見ては国家体制や法制度について私に説いていた。とても精力的な人で、私のブレーンとしても活躍した。

最後に武術を教えてくれたガジャルダ先生である。ガジャルダ先生は透清国最後の英雄と言えるだろう。壮絶な戦死を遂げるまでの私に生きていく為の術を教えてくれた。ただ、ようやく馬に乗れるようになっただけで、他はほとんど身についていない。

「陛下。陛下は必ず生き抜いてください。私たちが戦う意味は、陛下にあるのですから」

日に焼けた皮膚に、生気をたつぷり含んだ強い瞳が私を見る。

「陛下はとても良い御子です。ですから、どうか人の生死を軽く思わないで下さい。私たちは死ぬことを怖いとは思いません。しかし、無意味に死を選ぶのを好とはできないのです。陛下にはまだ難しい

かもしれませんが……」

私は彼の言っている意味がよく分からなかった。当時すでに私の中に、私とその他の者では、存在も意味も全く違うという考え方が生まれていた。物心ついたときから皇帝として至れり尽くせりの扱いを受けていた私の心には、ガジヤルダ先生の思いは届いていなかった。

## 動き出した人々

### 第三章 動き出した人々

ここ最近雨が降らず、天気は良いが空は青というより白い。楼の最上階で貴公子全とした青年が、憔悴した表情で空を睨んでいた。

「耀華さま！旦那さまが呼んでおられます」

耀華と呼ばれた青年は、呼びに来た男の方向を向き、小さく、力強く頷くと階段を下りていった。

耀華の歩む道を阻むものは誰もいなかった。軽く会釈をして、皆が道をあける。耀華はただ前を見つめて足早に父親のいる一室を目指した。部屋の前についた時、扉は自然と開いた。

奥にある寢台に向う。

寢台には痩せ細った父がいた。以前は自信と威厳に溢れていたのに……。目の奥が熱くなるのを感じる。

息子がやって来たことを悟った父は、重く閉ざされた瞳を開けた。すると、驚くほど生気に満ち溢れていた瞳が耀華を見つめる。

「耀華か……。お前と話せるのもこれが最後だな……」

ずっと変わらない、重くずしりと響く声が耀華の耳に届いた。

「私はお前に透清国にこだわって欲しくはない。私は透清国に世話になった。透清国の臣下として生を終えられることを、誇りに思っている。しかし、お前は違う……。これから、時代が動く。お前は、お前の信じる道を進めば良い」

耀華は父の手を強く握った。

「しかし、私は……」

「父親として、お前の気持ちは分かっているつもりだ。私が、お前の呪縛を持っていこう。私の自慢の息子よ。良い子に育った……」

急に声が小さくなった。まぶたが眼球を隠す。もう一度瞳が開かれた時、その目には、さっきまでの力強い光はなかった。うつろに

宙を見つめている。耀華の握っていない手を、小さく伸ばした。

「茜。やっと、会えるな……」

それは、耀華が父親の声を聞いた最期となった。一週間後、父は再び目を開くことなく息をひきとる。

「耀華さまが若旦那さまになれるのですね」

葬儀が終わり人段落つくと、瀬木が耀華に向っていった。瀬木は高齢ではあるが、足取りもしっかりしていて、頭の切れもまだまだ若い者には負けない。5歳の時から奉公でこの家に入っているという。

「すまない。瀬木。私はここを出ようと思っている。身一つになって、やりたいことがあるのだ。家の事はちゃんと整理してから出るつもりだ」

耀華は一言ひとこと、言葉を選び、搾り出すような声で言った。

瀬木は驚きを隠さない。落胆のこもった声で答える。

「耀華さま、それは……」

「瀬木の思うことは分かっている。しかし、父上も私がここに残ることを望んではないと思うのだ。透清国は残念だが長くない」

「本来なら耀華さまこそ、皇帝になるべき方でしたのに……」

瀬木の言葉に耀華は首を左右に振る。

「いや。私が皇帝の位につこうがつくまいが、結果は変わらない。

私は皇帝にならなかったことで、未来を手に入れた。皇帝になることは過去を手に入れるに過ぎない。私は思うのだ。瀬木。新しい時代は、透清国を必要としていない……」

「私は古い人間ですから、そのようなことは分かりません。透清国こそが、私の国ですから。ただ、耀華さまがそのようにお考えとは……私にはお引止めすることはできないのですね」

目を伏せた瀬木の姿が急に老けたように思えた。耀華は瀬木の手をそっととった。そして、小さく呟く。

「すまない……」

翌日、耀華は後のことは全て瀬木に任せて、家を出た。この二人

が再会することは二度とない。

耀華が家を出た同じ日、透清国南部最大の港・南海に春日光が降り立った。隣国の大和国から帰ってきたのだ。大和国は、新しい軍事技術を開発した西の国々の干渉から、東の国で最初に独自の方向性を導き出した国である。現在、東の国々の志士たちが大和国に集まっていた。そこで春日は、大和国に情報を集めに行ったのだ。そして、大和国を新たな国の建設にあたり見本にしようと決めた。

春日を港まで迎えに来た者は百人を超えた。その中で春日に一番先に声をかけたのが宗純真である。

彼は南洋省・南海の商人の家に生まれた。一族の多くは西の国々へ渡り、透清国の品々を売ることと財を成していた。二人は、イングルの教会で出会った。宗が新しい思想によって透清国救済の道を探っている時のことであつた。それが春日に出会い、一歩進んだ革命による人々の救済に変わった。

「春日殿、大和国はどうでしたか？」

「思った以上に進んでいた。短期間ですごい変化だ」

「具体的には？」

「街へ出れば、みなが西側の服装を着、西側の乗り物に乗っている。国全体が西側を追いかけていた」

春日はいったん宗との会話を切った。

春日を待っていた者全てが、彼の声を聞きたがつていた。その熱に押されて、春日は壇上に登る。

「私はイングルを中心に西側諸国を回り、大和国にも行った。そして、私は自分が何をなすべきか分かった。その第一歩は、透清国の打倒である」

大地を揺るがすような拍手と歓声が生まれた。

「世襲的な君主制を打倒し、私たち一人一人が選んだ代表者が私達の国を統治すべきである。そして、国の富はその国に生きる全ての人々と分かち合うべきである。富の独占は許されない」

春日光が帰って来たことによって、今まで透清国内で起こった単発的な反乱は、一気に加速度を上げて統一されていく。

「摂政王どうされます!」

各地の情報を一通り報告した後、宰相のチエルリンは皇帝の父である摂政王に意見を求めた。誰を反乱軍鎮圧に行かせるか。

「ガジャルダが良いのではないか?」

チエルリンは首を左右に振った。摂政王はガジャルダに強い信頼を寄せている。だからこそ帝師に選んだのだ。

「ガジャルダは武の人です。武の面では透清国内で右に出る人はいません。しかし、智の面では不安があります。軍全体を統治するのは難しいでしょう」

摂政王は考え込んだ。

「では誰がいるだろうか。適任と思われる者には皆要所を任せている。外国との事がある為、兼任はできないだろう?」

「そうでございます。摂政王。兼任などさせては、外国に我国の人材の乏しさを公表するようなもの。危険でございます」

「では、他に誰が……」

摂政王は頭を抱え込む。チエルリンも厳しい顔をした。

そして、思い出したように顔を上げた。

その動きはゆっくりで、微量ながらに毒素を含んでいた。

「炎世包でございます」

摂政王は、ハツと思いつくような顔をした。

炎世包は最年少で透清国の元帥になった逸材である。彼は戦場で負けたことがない。透清国最期の勝利は炎が指揮を取った、隣国・高国との戦いである。

なぜそのような人物が国政の中心から外されたのか。それは、炎が望諸帝の反乱に関わっていたとされるからである。喜太后はその後すぐに炎を解任した。炎が首謀者だったと言う噂もある。摂政王は迷った。

「しかし、炎世包は……」

「摂政王のおっしゃりたい事は分かります。しかしこの緊急事態、人材を惜んでいる場合ではないのではありませんか」

摂政王といわれても、国政には素人同然である。摂政王はそれをよくわきまえていた。また、摂政王は自分自身が優柔不断であることを認識しており、決断するのが苦手であったのだ。チエルリンの方が国政には何倍も詳しい。結果、摂政王はチエルリンの案を受け入れたのである。

こうして反乱軍鎮圧の軍権を炎世包が握ることになった。炎世包は、最初は拒み。三回目でやっと、この任を受けると連絡が摂政王の元に届いた。稀代の英雄が登場することにより、鎮圧軍はもとより、透清国全体が活気を取り戻すように思われた。

黄暦911年初夏。透清国・炎世包、反乱軍・春日光の構造は誰の目にも明らかな図式となっていた。

部屋に西日が差し込んでいる。初老の男は額の汗を拭った。両眼には恐ろしいほど鋭い光が浮かんでいる。

ノック音が二度響き、ドアが開けられた。

「葵か」

「炎閣下。レイ長官がお見えになりました」

「レイ長官？あいつが長官か？あんな貧しい身なりをして」

「お忍びと言うことですが……」

「ピエロに相應しい姿だ」

炎は薄笑いを浮かべる。その顔を見た葵は体中から汗が噴出した。

「葵。丁重にレイ殿をお連れしなさい」

葵は一礼して部屋を出た。

五分ほどして、ドアはがノックされる。

「久しぶりですな。炎將軍」

恰幅の良い、小太りの男が入ってきた。

この男はレイ・ユエンハンという。数ヶ月前までは、南洋省の行

政長官をしていた。透清国には16の省がある。省は、最上級の行政区画である。南洋省は透清国の南に位置し、貿易の拠点に当たる。その彼が、現在は反乱軍の重要幹部になっていた。春日光が帰ってくるまでは、名ばかりではあるが、最高司令官にまでなっていた。反乱は911年6月末、南洋省の武中で起こった。炎の調べによるとこれを指導したのは、宗純真である。宗は反乱を南洋省全域に広げると、レイを捕らえた。

レイは高いところが好きだった。自分の執務室はいつも一番高い所に置いた。もちろん脱出経路はもちろん用意していた。けれども、肝心な時に機能しなかった。それどころか反対に警備の薄いそこが進入経路として狙われたのだ。

レイは一人執務室で頭を抱えていた。窓の外など見なくなかった。逃げ道がすでないことを他の誰より分かっていた。最後のプライドが、取り乱した姿を見られない為に、部屋に一人でいるという選択をさせていた。

ドンドン。

ついに、ドアが荒々しく叩かれる。

レイは観念してソファアーに腰を下ろした。

派手な音がしてドアが破られる。

銃を持った屈強な完全武装の兵士が二人入ってきた。その後に軽装の男が一人涼しげな表情で入ってくる。

「さすがレイ先生。覚悟を決めていらっしゃるようですね……」

年はレイより年下で、40歳前後と思われる。長身はあるが、痩せていて、一対一の勝負ならレイが圧勝で勝つだろう。

「お前は誰だ」

精一杯の虚勢だった。

「宗純真と申します。以後お見知りおきを」

レイと対照的に、宗は落ちついている。

「私をどうするつもりだ？」



「どうすると思います?」

宗はレイを試しているようだった。

「殺すつもりか?」

レイはうめくように言った。部屋には更に二人の兵士がやってきた。四つの銃口がレイに向けられる。

「死にたいですか?」

「死にたくない。私が何をしたと言っただ」

「貴方は自分が潔白だと思いですか?」

「そりゃ、この地位につくまでには色々やったさ。しかしそれは皆やっていることだ」

賄賂・買収・密売・暗殺……権力を得るためにレイは何でもやってきた。それを悪だとは思わない。特に賄賂などは自分が関わっていないくても至る処で行なわれている。

「誰もが?」

宗は氷を吐き出すように冷たく言った。その姿に感情の起伏は全く感じられない。

レイは圧倒されてもう我慢できなかった。

「殺さないでくれ。何でもするから、殺さないでくれ」

レイはソファーから降り、宗に向って拝みはじめた。

宗はそれを表情も変えず公然と受け止めた。左胸から黒い物体を取り出し、レイに向ける。

ドン。

銃を撃った。レイの足元に穴が開く。

「ヒィー」

奇声が部屋中に響き、壁がそれを吸収する。

「殺さないでくれ、殺さないでくれ」

レイの姿をみて兵士達に軽い動揺が起こった。宗は前に進み、座り込んでいるレイの肩に手を置いた。レイはゆっくりと顔をあげ、宗を見る。宗の顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「透清国の貴方は死にました。これからは、私たちと一緒に働いて

くれますか？」

宗の顔が、まるで仏のように慈悲に溢れた表情だとレイは思った。レイはただ頷いた。いや、頷くしかなかった。

「レイ先生を殺す気など毛頭ございませんでした。あまりレイ先生が気にされたので、つつい調子に乗ってしまい、このような愚行に走ったことお許し下さい」

宗は片膝をついて、礼に則り頭を下げた。

「レイ先生をお連れしてください」

兵士二人でレイを抱える。レイはすっかり腰を抜かしていた。それでも、身の安全が確保されたとみて、顔には余裕が表れていた。

宗は、春日の帰国を待たずして反乱を起こす決定をした。それは6月15日、外国人により透清国人が殺されたことに始まる。透清国は自国民が殺されたにも関わらず、何の抗議も対策もしようとしなかった。外国への不満は透清国への不満にすり替わり、爆発寸前まで人びとの感情が高まっていた。これに宗は便乗したのだ。

反乱は日に日に大きくなった。しかし、春日はまだ帰ってこない。反乱には指導者が必要だった。宗は表向きただの商人であり、財界で名を馳せているとはいえ、このような場では不十分だった。また、宗自信表舞台に立つ気はない。そこで宗は目につけたのがレイである。

レイは権力の妄信者であるが、無能ではない。また面倒見がよく、レイを慕うものは透清国にかなり存在していた。彼を味方につければ、革命を越して、建国が達成される中で大きな力になるだろう。宗は主導権を握ったまま、レイを見方につけることを決断した。

春日が帰国してからも、レイは冷遇されることはなかった。

「長く中央から離れていたが、最近戻る事ができた」

「えーえー、噂は聞いておりますぞ。再び透清国の兵権を掌握なさったと」

「もともと兵権は皇帝のものであられる。皇帝が幼い故、私が代行

しているに過ぎない」

「はあ」

炎とレイは10年以上会っていない。久しぶりの再会ではあるが、両者に感慨はなかった。

レイの興味のなさそうな返事に、炎は豪快な笑顔を浮かべた。

「下らない話をする為にここに来たわけではなかったかな。失礼。具体的な話をしよう。」

私は陛下から、貴方たち反乱軍を討伐するように命令を受けた」

レイの目が鋭く光る。炎は一気に核心まで話を持ってきたのだ。

「私が指揮を執れば、君たちを破滅に導くなど容易い事だ」

レイは顔をしかめ、口を開けようとした。炎はそれを押し、言葉を続けた。

「しかし、軍事的に制圧したところで透清国延命はできまい。聡い君なら分かっているだろう」

レイは作ったような深刻な顔で頷いた。

「春日光に会わせてもらおう。話し合おうじゃないか。春日も国を思つて反乱を起こしたのだろう。分裂状態が長く続けば、諸外国の餌食になってしまうのは明白だ」

「武力による衝突を避けられる可能性があるなら、それを模索すべきだな。春日殿に私から話してみよう。互いに国を思っている。目的は同じだ。今は手段が違っただけでな」

レイはそう言うのと立ち上がった。

「炎將軍の意、十分に承知した。後は私に任せてもらおう」

「恩にきるぞ」

炎とレイは硬い握手をした。レイはコートを着直し、部屋を出ようとする。扉は自然煮に開いた。すぐ外に葵がいる。

葵が深く一礼すると、レイはその後についていった。扉が閉まる。扉が完全に閉まるのを確認すると、炎は自分の椅子に座りなおした。顔には満足の表情が浮かぶ。

「どこまでも登っていきこう。上へ、上へと……。一番上まで辿りつ

いたら、いったい何が見えるかな？」

炎はつぶやく様に言った。その声は壁に吸収され、誰の耳にも届かなかった。

7月19日、春日らは南洋省を拠点に太平民主国を立てた。透清国の絶対君主制に対し、太平民主国は共和制を執った。

臨時大統領には春日が選出される。

就任式は簡単ではあるが、活気に満ち溢れたものだった。壇上には太平民主国新内閣のメンバーが立っている。その半数以上が透清国から官職を与えられていた者たちである。その様子を、宗は会場の後方からオペラグラス片手に見ていた。宗の隣には娘・宗柚靱がいる。一週間前に留学先のマイリカから帰ってきたばかりだ。

美しく洗練された姿は、会場の最後尾にいても、人の目を惹いた。会場は熱気に溢れ、拍手喝采は鳴り止む事がなかった。

「お父様。これでやっと外国諸国と対等でいられますわね」  
娘の言葉に宗は顔を横に振る。

「まだまだこれからだ。お前にも太平民主国の為に働いてもらうぞ」  
「もちろんですわ。私はこの国を助きたい。その為なら私にできること、最大限させていただきます」

柚靱の目に熱い灯がともる。

宗は自分の娘の聡明さに深い信頼を置いていた。娘の発言に満足して頷く。

「お父様はどうして、あそこに立たないの」

柚靱は美しい手を壇上に向けた。

「柚靱。人には一人一人に異なる役割が与えられているのだよ。私の役割は壇上に立つことではない。壇上に居る者も、居ない者も、この会場に居る者全員が、私の存在を知り、立場を十分理解している。それで、十分なのだよ」

宗はオペラグラスを再度除いた。春日に標準が合ったところで手を止める。春日は満面の笑みで、会場の声援に応えていた。

「私達の戦いはこれからなのです」

宗は小さく呟いた。微かに父の声を聞き取った柚鞠は父の方を向く。宗の顔には不安が広がっていた。

「つまらないな」

私はベッドから身体を起こした。

午前中の授業が終わり、今は昼寝の時間だ。今日は全然眠くならない。なんだか外が騒がしいのだ。いや、皇帝の睡眠中に騒ぐような野暮なことが起こっているのではない。それどころか、いつも外にいるはずの人の気配すらしなかった。

朝から皆の様子が違う。空気が緊張していた。

私は部屋から抜け出すことにした。なんとなく教室の方が騒がしい気がして、教室に行ってみる。

珍しいことに誰ともすれ違わない。いつもはこんな自由に動くことはできないのに。部屋を出ようとしただけで理由を問われるのだ。後ろに誰もいないなんて、初めてかもしれない。一人で歩くのは変な気分だ。

「陛下！」

押し殺した声が背後から聞こえた。

小さな冒険は終わった。振り返ると、茶力士が小走りに寄って来る。「陛下。どうされたのです」

「外の様子が気になって、眠れなかったのだ」

「うるさかったですか？」

「いや。いつもより静かだ。何かあったのか」

「いえ、それが……」

茶力士が声をつまらせる。

「また、私には言えないことなのか」

私は声を荒立てる。茶力士がやっと何か言おうとした時、摂政王がやってきた。

「摂政王様」

「陛下。いらつしやったのですか」

摂政王は、すぐに私の方を向いた。

「居てはいけないのか」

すっかり不機嫌になっていた私は、摂政王を睨みつける。摂政王は少し怯んだように首を横に振った。

「いえ。そうではありません。ちょうど良かった。いや、これは失言ですね。炎元帥が静太后に面会されます。陛下も一緒にされると良いでしょう」

私は炎の存在について知ってはいたが、実際に彼がどのような権限を与えられていたか、当時はまだ理解できていなかった。ただ、なぜ炎が父の摂政王ではなく、静太后に面会に来るのか不満だった。私は顔をしかめる。

「お嫌ですか？」

父のこの態度が私をイライラさせる。

「嫌だとは言っていない。まだ炎に会ったことはなかったな。会ってみよう」

「ハッ」

茶力士は急いで私の服を調べ、教室の南の部屋に案内した。

部屋の奥にオンドルがあり、少し高くなっている。そこにはすでに静太后が座っていた。静太后は私が部屋に入ると、オンドルから降り、挨拶をした。私は静太后の右側に座った。

しばらくすると小太りの男が入ってきて、赤い絨毯の上で跪いた。

「陛下お初にお目にかかります。炎世包でございます」

「噂は聞いている」

炎はなぜか私と目を合わそうとしなかった。

「静太后様。お久しゅうございます」

「堅苦しい挨拶など良い。先に書簡を読んだ。どういうことだ。納得のいく説明を聞かせてもらえるのだろうか」

静太后はすでに興奮していた。

部屋には三人しかおらず、私は二人の会話の意味が全く分からなかった。静太后が執拗に炎を攻め立てていて、口を挟む隙はなかった。

「どうにもならないのか」

「申し訳ございません。私の力不足です」

静太后は目いっぱい涙を浮かべ、ぼろぼろとこぼれだすと声を出して号泣した。つられて、炎も号泣し始める。炎はポケットから透清国風でない柄の入ったハンカチを取り出して、目を押さえた。

二人の大人がなぜ泣いているのか、不思議でならない。炎は特に鼻をすすりながらしゃべるので何を言っているか分からなかった。

「陛下の退位。どうか、どうか、ご了承いただけますよう。切に、切にお願い申し上げます」

炎は帰る時、一人では起き上がれず、両脇を支えられるようにして退出した。

炎はこの後、宮中を退出する時襲われ、それを口実に二度と宮中にやってくることはなかった。

私が炎と対面した最初で最後であった。

私は炎との対談が終るとすぐに摂政王を探した。

「摂政王！」

「陛下」

私が声を掛けると、摂政王は私に駆け寄り臣下の礼をとった。摂政王と一緒に居た茶力士が続く。

「なぜ今の席、同席しなかったのか」

「ハッ。申し訳ありません。私は陛下に先んじて炎と話をしておりました」

摂政王の顔に私の嫌いな卑屈な表情が浮かぶ。

「そうか。ならば良い」

摂政王の顔が緩む。右手が伸び私の頭を撫でようとした。その手が私の頭に触れそうになった瞬間、摂政王は我に返ったように手を引っ込める。

「申し訳ありません」

摂政王は頭を下げると踵を帰して、行ってしまった。茶力士が心配そうに私を見る。

「陛下……」

摂政王に対して別に何か感じたわけではなかった。しかし、茶力士の声を聞いた途端、何ともいえない感情が体を覆った。

ドカツ。

茶力士のすねを衝動的に蹴った。

「陛下……？」

さつきと同じ言葉だが茶力士の表情は全く違う。

「ふん」

私は逃げた。雪の元へ走る。そこが、唯一私が何も考えず安心できる場所だった……。

炎は不機嫌だった。摂政王らの面談は上手くいったと思う。

炎は宮中を訪れた後も色々と予定を立てていた。ところが、退出時に賊に襲われ負傷者が出てしまい、それどころではなくなってしまうのだ。

炎は苦虫を噛み潰したような顔で書斎に居た。扉がノックされると、思わず扉を睨みつけてしまう。控えめに葵が部屋に入り、用件を伝える。

「湾生さまがいらつしやいました」

「湾生が……分かった。通せ」

葵は恭しく頭を下げ、扉を閉めた。

「やっぱり、不機嫌そうだな」

「当たり前だ」

陽気そうに湾が言うと、炎は机を軽く叩いて応えた。湾は炎より10歳以上年下だが気が合う。出会ってまだ2カ月だがすでに旧知の仲のようだ。



「まずは謝らないといけない。今日炎將軍一行を襲撃したのは我党員に名を連ねるものだ」

炎の目が鈍く光る。

「そうか。革命党の仕業だったのか。おかげで、イングルの総領事でジェンキンス氏と会う約束をすっぱかしてしまった。弁明の電報を送ったが返事はない」

「ああ。今日はそのことで来たんだ。大和国の川田さんを知っているか」

「知らない」

炎はそつけなく応える。

「そうか、なら今度時間が合えば紹介するよ。川田さん今日の事を知って、炎さんとジェンキンスさんが会えるよう仲介しようって言うてるんだけど」

「大和国が……」

炎の考えこむ様子を見て思わず、湾は顔に笑みが浮かぶ。

「炎さんが考えてること分かるよ。でもまあ、そんな考え込みなさなあって。炎さんが一方的に損する話じゃないだろ」

大和国が何を狙っているか想像はつく。それも、イングルが仲介役をかつてくれるなら、悪い話ではない。

「その通りだな。……では大和国の好意に甘えさせてもらおうか」

「了解。で、いつが良い？」

「明日だ」

さすがに炎の要求に湾は驚いた。

「また、わがままだね。まあ大丈夫でしょう。時間はこちらで決めさせてもらっても良いかな」

「かまわない」

「よし。じゃあ今日の用件は以上だから、お暇させてもらおうかな」  
炎が親指と人差し指を口元に近づけ2回傾けた。

「本当はそうするつもりだったけどね。誰かがわがまま言うから、ゆっくりしてられないよ」

炎は、今度は膝を叩いて笑った。

「そうだったな。すまん。今度ゆっくり飲もう」

湾は立ち上がり、葵が淹れていた茶を一気に飲み干した。

「上手いな。この茶」

「そうだろ。葵は頭の回転が速いのと、茶を入れるのが上手いので雇っているんだ」

「では今日はこの茶に満足しておこうかな」

そう言つて、頭を下げると湾は足早に部屋を出て行った。

湾が表舞台で名を知られるようになったのは、摂政王暗殺未遂で逮捕されてからである。その後、透清国で最も大和国と深い繋がりを持っている親善王家により丁重に保護された。湾は親善王家での生活の中で皇族とも友好関係を持った。透清国打倒の立場が同じ事から太平民主国にも知り合いがいた。湾生は、透清国内で独立して存在していた勢力を影でつなげて行ったのである。

春日と炎が会ったという突然の報を受け、宗は苛立ちを隠しきれなかった。春日の元へと急ぐ。

太平民主国の政府は、武中の行政府に置かれていた。嚴重に警備されているが、宗は顔パスである。いつも物腰が柔らかく、警備員に対しても配慮を欠かさない宗であったが、今日は全身からピリピリしたオーラを出している。警備の者達は、心配そうに宗の背中を追った。

すでに、柚靱は春日の秘書となっていた為、まず柚靱が宗の前に現れる。

「お父様。どうされたのです」

柚靱は宗の表情がいつもと違うのに、戸惑いを感じた。

「春日殿は居るか」

「はい。事前に連絡頂いていましたので、大統領は待っております」

「そうか。では即面会を願う」

「はい」

柚鞠は宗の2、3歩前を歩く。一際堅牢な扉の前で足を止めると、扉をノックした。

中から春日の声がして、柚鞠が扉を開く。

春日は立って、宗を迎えた。顔には宗とは対照的に晴れやかな表情を称えている。

「どうしたんだ。そんな怖い顔して」

「炎世包と会ったのですか」

「ああ、協力することで、話は決まった」

宗の顔が厳しさを増す。

「協力？炎世包と私たちでは目的が異なるではありませんか。なぜ、炎世包と会う前にご相談頂けなかったのでしょうか」

「いや、相談しようと思ったさ。時間がなかったのだ。しかし、全て君に相談しなくても良いだろう」

「そうではありますが……」

「炎氏は外国勢力が日に日に干渉を強めている現状で、国内で争っている場合ではないとおっしゃる。太平民主国も今が大切な時だ。無闇に争いを行なうべきではない。我々は私利私欲で動いているのではなく、国の為、民衆の為に動いている。そうではなのいか？」

「それは正論ではありますが、それが炎氏の本心ではないでしょう」

「純真の言いたいことは分かる。透清国と太平民主国は、いわば水と油。交わることはない。だがやはり、最も重要なことは、この土地に外国から独立を守った民主的な国を造る事なのだ」

「炎氏と手を結ぶ事が、それに繋がるとお考えですか？」

「無論だ。透清国と争わずに打倒するには最善の道だろう」

「炎氏は確かに尊敬に値すべき人物です。しかし、彼は私たちが支配できる人物ではないですよ」

春日の顔は赤みを帯び、声を荒げた。

「私は炎を支配しようなどと考えていない。協力しようと言っているのだ。私では炎と対等でいられないというのか」

「そうです」

宗は迷わず言い切った。春日の目に強烈な怒りの火が灯った。他の者なら何もいえなくなるだろう。だが、宗は違う。目をそらさず、口調も荒げることはなかった。

「内閣の半数が元透清国の人間です。透清国に戻ることはなくとも、炎氏側につくことはあるでしょう。後の憂いとなることは明白です」  
「お前の言いたいことは分かった。だが、もう決めたことだ。仲介はイングルがするそうだ。炎はすでに外国からも認められているのだ。純真、私は私には目指すものがある。炎には負けられないさ」

春日は宗に背中を向けた。

「すまないが、今日はもう帰ってもらえないか。また、ゆっくり話そう」

宗は春日の気持ちを知り、一礼して部屋を出た。部屋の前では柚鞠が心配そうに立っている。

「お父様……」

宗の顔から入るときの厳しい表情が消えていて、柚鞠はホッとした。しかし、それと同時に不安がよぎる。

父の落ち着きが、一瞬みえた春日の姿と対照的に思われたのだ。

二人の間に決定的な決裂ができてしまったのではないか。

それを見透かすように宗は顔を横に振り、笑顔を作った。

「心配することはない。お前はお前の判断で動けばよいのだ。私が春日殿の違う道を歩くことはない」

そう言うと、宗は振り向くことなく、屋敷を後にした。この後、

宗と春日は一年余り会うことはなかった。

イングルの総領事を通して調停案がだされたのは一週間後のことである。太平国側と透清国側で協議が行われる。そして、即時停戦、透清帝退位にともなう炎世包の臨時大總統就任が同意されたのであった。

## 透清国の滅亡

### 第四章 透清国の滅亡

912年9月11日。透清国皇帝宣授帝退位にともない、透清国は滅亡した。静太后が退位の詔を發布した。

静かな幕引きとやっていいだろう。今までの王朝もこんな滅亡の仕方をしていない。透清国が滅んでも私の生活は全く変わらなかった。

イングル国仲介で、太平民主国側、炎世包側は、透清国に即時停戦に伴う皇帝退位、そして『優待条件』を提案したのだ。

優待条件はだいたい次のような内容である。皇帝の辞位後も、尊号は廃止しなくても良い。太平共和国は諸外国君主を遇する礼を持つて遇する。辞位後は、年間四千万円支給する。皇帝は辞位後も、暫時宮中に居住して良い。

飴とムチを同時に提示されて、静太后はうろたえた。御前会議を急遽開き、皇族や側近を収集した。始めの内は主戦論を唱えるものが多かった。しかし、徐々に状況がつかめてくると主戦論の発言は少なくなっていた。

そして、宮中に一報が届いた。

「ガジャルダ將軍が戦死しました」

「何！」

皆が息をのんだ。使者の声が聞こえなかったものは、ただならぬ空気の変化に驚き左右を見た。

「状況の報告を……」

摂政王の緊張した声が響く。

「ガジャルダ將軍が率いる軍は反乱軍を追って南下していました。そこに前線で待機していた黄晴將軍が反転し、ガジャルダ軍を後方

から攻撃したのです。反乱軍を追って縦に伸びていたガジャルダ軍は寸断され、黄晴軍に有効に対応する事ができませんでした」

「ちよつと待て。黄晴は炎の旗下ではないか」

「炎は完全に透清国仇をなしたというのか！」

「黄晴……お前……」

砂嵐が起こり、視界は悪かった。しかし、ガジャルダは10メートル先にいる人物が誰かはつきりわかった。

「久しぶりだな」

ガジャルダの周りにすでに見方はいない。手に持った血塗られた大刀が、ガジャルダの勇猛さを物語っている。その両眼には、怒りの業火が渦を巻いていた。

「そう怒るな。お前の気持ちも分かるがな。時代は変わる。透清国のために生きるだけが道ではない」

黄は息を整えた。朗々たる声でガジャルダに語りかけた。

「一緒に来ないか。お前なら大歓迎だ」

ガジャルダは笑った。大地も揺れるかと思われるほど、豪快な笑いだった。一点の迷いのない声が天を刺す。ガジャルダを取り囲んでいる兵士達の額に汗が噴き出した。

「笑止」

瞬時にして表情が変わった。

ガジャルダは手に持っていた大刀を振り上げ、黄に踊りかかる。

その刀は切る能力を完全に失っていたが、黄の頭を叩き潰すには十分なはずだった。

「ドン」

時が止まった。大刀の10分の1もない銃が黄の手にあった。銃は真っ直ぐガジャルダに向けられている。その殺傷能力は、大刀より何倍も高かった。

ガジャルダは2歩後ろに下がった。

「うをおー」

咆哮が、時を動かす。

黄は、表情を変えず右手を上げた。

『ドン。ドン。ドン。』

自分の意志とは違う動きを強要されたガジアルダは、終に、二度と自分の意志で動く事ができなくなった。

「愚かだな」

黄ははき捨てるように言った。

「黄晴様。遺体はどう処理しましょう」

壮絶な場面を見たばかりの兵士の声は上ずっていた。

「好きにしる」

黄はそっけなく、突き放すように言った、

「それはどういう……」

「言葉以上の意味はないな。私は死んだものに興味などない。ま、無難に処理しといてくれ」

そして、黄は何事もなかったかのように全軍の指揮を執った。

御前会議の空気は重かった。炎の完全なる裏切りは、もはや誰の目にも明らかだった。

「軍費さえ整えば、やつらに打ち勝つのは難しいことではないでしょう」

主戦派の一人凜俊が言った。

「訓練された兵士も軍費も全て、炎に持っていかれてしまった」

摂政王は首を横に振り、ため息をついた。

「下手に抵抗すれば、『条件』も消えてしまうものではありませんか」  
チエルリンが疑問を投げかける。

「私は条件さえあれば、共和制も君主制もどちらでも実質的に大差ないと思います。陛下は陛下で居られるわけですし、摂政王も摂政王としての立場を守れるではありませんか」

会議の静かな雰囲気壊れ、ざわめきが起こった。チエルリンの発言は核心に触れるものだった。炎が宮中に攻め込んできたら、對抗する術はないのだ。そうなれば炎は力で透清国を滅ぼしたことになる。優待条件を行なう必要などなくなるのだ。

御前会議は結論を出せず、散会が続いた。そしてまた、事件が起こった。革命党が皇族の家に爆弾を仕掛け始めたのである。負傷者はもちろんのこと、爆死者が出た。

強硬に主戦論を唱えていた親善王も革命党の標的にさらされていた。大勢が優待条件受け入れに傾き、それが変わる事がないと悟った時、王都を離れたのである。

退位の詔が發布されたその日、宮廷内は押し殺したような泣き声に包まれた。私は摂政王の横でただ座っていた。

それも終ると、その日はさすがに授業もなく暇だった。誰も私に今何が起っているか、詳しく説明してはくれなかった

私は茶力士の目を盗んで高樓の屋根に上った。風が吹いていて、少し怖い。

でも、下で聞こえていた頭が痛くなるような不気味な音を聞くより何倍もましだと思った。宮中は広く、高樓に登っても全体を見ることはできない。それでも、大きな荷物を背負って宮中を出る人々の姿が目についた。

何人かが、うつろな瞳で宮中を振り返る。幼心に、その光景は尋常ではない印象を与えた。

私には、外の記憶がない。物心がついたときには、ここにいて外に出る事ができなかった。外の世界がどんな場所なのか、全く想像ができなかった。彼らがあんなに陰鬱な表情でいるからには、きっと嫌な事に溢れた世界なのだろう。

気づけば、目から涙が溢れていた。視界がぼやける。涙は頬をつたい、首をたどって、私の胸の奥へと染み込んだ。



私もいつか、ここを出て行かなくてはいけないのだろうか。

それはまだ、遠い先の未来に起こることだろう。

「陛下」

下から、茶力士の声がする。まさか屋根の上にいるなんて思ってもいないだろう。私は茶力士を心配させないために、ここに居た事がばれないために、ゆっくり下へと降りていった。

まだ、私の『時』は動き出さない。 (了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6267a/>

---

姫君の忘れ物

2010年10月8日15時34分発行